



東京日々新聞

八百九四号



去る頃野羽朽木
 縣下にて捕縛
 強盗有ん名と金之助と
 呼んで本年僅十八歳産も同所者
 夫は平素容止温和にて親に勤仕
 信實ありあるのこころに
 容れ女子ありても見まはせ
 最も平みありあつた心の駒の
 狂ひ人夜毎
 小寄る自浪
 の所為秀
 大膽太
 雷豪押入て
 財と得るも許交りたり或夜
 何方の夜泊ある路路と露の委敷と数多泊せし其
 家へ忍び入り年増あり藝妓と執強女あさんと挑み婦人入
 りて驚き一々程よく言て身降事事の所色々と評謝まぢ
 後背ふ恐怖で居居ふいと新造ある慶女の手と執り御身が
 切られ此女子とて是非其今宵舞受とて言ふ以前の
 藝妓が賊の主とて君はたか青年ありといふあから
 妻今迄耻しき事といひて又外心移は難頼らばと氣轉の格
 氣空言とて知れどもその理の當然其夜は空手く立去り
 入室の中其掛へ申立旧座規則とて一袋て厚き仁徳の聖代と見極

蕙齋芳幾

墨陀西岸
温克龍吟迹

彫具定屋
彫工伴吉

